

天才の恋愛作法

阿部公彦

『マチネの終わりに』の主人公時野聡史は「天才」だ。高校時代に国際的なコンクールで優勝してクラシックギタリストとして華々しいデビューを果たした時野は、「単に才能に恵まれただけでなく、数ある才能の中でも、特に良いものに当たった」とされる。その後も着実にキャリアを積み重ねて演奏に磨きをかけ、そのあまりの上手さと完璧主義ゆえ観客が「息をすることを忘れてしまった」ほどのレベルに達する。今、彼は三八歳。演奏家として絶頂期を迎えつつあるかに見える。しかし、ある日時野は一人の女性と運命的な出会いをして恋に落ちる。そして、彼の演奏活動も長いスランプに陥ることになる……。

毎日新聞紙上に一〇ヵ月余りにわたって連載されたこの長編作品が描くのは、天才的な

で、考え方にも筋が通っており、他人に対する思いやりもたっぷり。私たちが天才に期待するような、エゴイスティックで唐突な行動とは無縁なのだ。

そんなふうに細心の注意を払って造形されたナイスな青年時野聡史が、それでもなお、「天才」を生きているというところにこの作品の妙味はある。舞台は華やかだ。東京からパリ、マドリッド、ニューヨークと彼は世界中を飛び回って演奏をする。そこにイラク紛争、9・11、リーマンショック、東日本大震災といった誰もが知る「歴史」がからんでくる。かつての英雄叙事詩を彷彿とさせるような、大きな空間移動の側面と現代史のクロニクルという側面とをこの作品は併せ持つ。

こうなると気になるのは、時野の恋愛相手の小峰洋子である。クロアチア人の高名な映画監督と日本人の母との間に生まれた洋子は、観客席に座っているだけで演奏家の目や釘付けにするほどのエキゾティックな美人である。まさに天才的なクラシックギタリストが恋に落ちるにふさわしい相手だ。あるいは一部の読者は洋子に、ギタリストを翻弄するような悪女らしさや、場合によっては「並外れた拳銃さばきの女スパイ」のような役柄を

ギタリスト時野聡史と小峰洋子との哀切感に満ちた恋愛である。考えてみれば近代小説は恋愛を描くことは得意としてきたが、正面切って天才を描くことは何となく避けてきたようにも思える。英雄や天才は古典古代の世界には生きていたが、近代社会はそうした傑出した存在を許容しなくなってきた。無理に英雄を描こうとすれば、パロディになってしまう。漫画になっってしまう。今、私たちが小説の中で多く目にするのは等身大のごく凡庸な人物か、むしろ「平均以下」の並外れて不幸な人、異常者、愚者、変態、愚連隊ばかりではないだろうか。それはとりもなおさず小説というジャンルが「偉大さ」よりは「矮小さ」、「きれいなもの」よりは「汚れたもの」、「遠方」よりは「身近さ」を描くことで自らを正当化してきたからである。

期待するかもしれない。しかし、残念ながらこの作品はそうした安易な設定には流れない。物語の展開とともに明らかにするのは、この世ならぬ美貌とは裏腹に、彼女がごく人間的で、ふつうの人だということである。テロに巻きこまれかけてPTSDになり、生理がこなければ妊娠したのではないかとドキドキする。男性関係も派手だったわけではなく、時野からのアプローチに「結婚」の一言が盛りこまれていないことに敏感に反応したりする。

しかし、そんな洋子の心が動く。ニューヨークで待つフィアンセに別れを告げ、彼女は時野との関係に向けて大きな一歩を踏み出すのである。運命の「携帯電話置き忘れ事件」が起きるのはここだ。平野の筆さばきは実に巧みなので、このくだりを読むとき読者は思わず登場人物に対してヤジや応援を送ってしまいそうになるだろう。詳細を書くわけにはいかないが、偶然と陰謀とがからみあって、事態は思いがけない方向に進むのである。

おもしろいのはここで重要な役割を果たすのが、時野が洋子に送るメール文面の「軽さ」だということだ。作家が周到に準備した天才ギタリストの人物像がここで効いてく

マチネの終わりに

平野啓一郎

結婚した相手は、人生最愛の人ですか？

恋の力を失った大人に贈る恋愛小説

「マチネの終わりに」
平野啓一郎

しかし、著者の平野啓一郎は決して時代錯誤的な天才恋愛物語をでっちあげようというのではない。随所で周到な準備がなされ、仕掛けがほどこされている。たとえば時野はたしかに演奏面で並外れた才能に恵まれているかもしれないが、それはあくまで「上手さ」や「完璧主義」として描かれる。つまり、彼は限りなく天才的なかもしれないが、果たして真の意味での天才なのかとの疑いが湧く。最後まで読むと、その疑念の意味ははっきりするだろう。また、私人としての時野は周囲に気を遣い、ギャグを連発して空気をなごませるような人物である。多少事実を歪曲してでも自分を滑稽に見せてウケをとる。気難しい天才演奏家の像とは対極にあり、まったくもって今風の好青年なのだ。作中に描き出される彼の心理もいたって真面目なもの

る。周囲に気を遣い、自分を笑い物にしてでも空気を和ませようとする天才ギタリスト。しかし、洋子との恋愛の大事な局面で、この「軽さ」が裏目に出て意外な結果を引き起こすことになる。ここでは、洋子のごくふつうの人間としての「重さ」が、天才たる時野の「軽さ」と決定的にすれ違ってしまふ。誤解はさらなる誤解を生み、小さな陰謀の種が巨大な波を生み出して、二人の世界を取り返しのつかない方向へと押し流してしまふ。

若い読者はこの小説を恋愛の教科書として読んでいい。「年齢とともに人が恋愛から遠ざかってしまふのは、愛したいという情熱の枯渇より、愛されるために自分に何が欠けているのかという、十代の頃ならば誰もが知っているあの澄んだ自意識の煩悶を鈍化させてしまふからである」なんて一節もある。あちこちにちりばめられた思索からは、テクニクを閉じた宇宙として完結させず読者に向けて解き放とうとする作家の試みが見て取れる。古風な佇まいを持ちながら、大きな物語の力で読み手を引っ張る作品だ。

(毎日新聞出版刊・税別定価一七〇〇円)